

# 資料館だより

## 目次

- 特集 … (2)  
特集、イベント報告 … (3)  
R3年度企画展報告 … (4)  
インフォメーション … (4)



「八重姫入水」 岩井玉水筆 伊豆の国市郷土資料館蔵

## 特集

# 伊豆の国市の八重姫伝説

伊豆の国市郷土資料館には10枚の現代画が所蔵されています。これらは現代の画家岩井玉水によって描かれたもので、今から43年前の昭和54年（1979）大河ドラマ『草燃える』の放映が決定した際、旧葦山町の依頼で制作されました。そのうちの「八重姫入水」「女塚自刃」が、八重姫の伝説をテーマにしたものです。「八重姫入水」には激流に身を投げる八重姫とそれを見て嘆く侍女たちや村人が、「女塚自刃」には松の巨木の根元で姫の遺髪を囲み、短刀を胸に抱く侍女6人の姿がそれぞれ描かれています。

「八重姫悲恋の伝説」のあらすじをご紹介します。

頼朝が伊豆で配流の生活を送っていたころ、平家の武将伊東祐親の娘・八重姫と逢瀬を重ねるようになり、一児（千鶴丸）をもうける。一方、京都大番役を終え3年ぶりに伊豆に戻った父祐親は、このことを知り、平家の臣下として娘と頼朝の仲を認めるわけにはいかず、生まれた子どもを川に沈め、頼朝にも手をかけようとした。そのため、頼朝は北条氏の館に逃げ込んだ。八重姫もこれを追いかけたが、頼朝とついに逢うことができず、悲しみのあまり眞珠ヶ淵に身を投げてしまった。

のちに村人たちは姫の悲しい身を憐れんで供養した。また、侍女達は姫に伊東へ戻るよう命じられたが、悲しみのあまり山中で自刃してしまった。

## 悲運の美女・八重姫

伊豆の国市の東隣、伊東市には平安時代後期、伊東祐親という平家方の武士が館を構えており、八重姫はその祐親の三女でした。『曾我物語』には「中にも、三は、美人のきこえあり」と、『源平闘諍録』には「国中第一の美女」と紹介されています。八重姫と頼朝は伊東の音無神社で人目を忍んで会い、ついに2人の間に千鶴丸が誕生します。

しかし、京都での職務を終え伊豆に戻った祐親は、八重姫が頼朝との子をもうけたと知って激怒します。そしてその子と頼朝を殺害するよう家臣に命じました。祐親は平家に仕える武士で、流人の頼朝の監視役ですからその頼朝と我が娘が結ばれるなどもつてのほかです。その一大事を知った八重姫の兄祐清は、祐親と頼朝の仲が悪くなることを案じ、先回りして伊豆韮山の北条時政に頼朝を匿（かくま）つてもらえるよう文を出しました。祐清の機転で無事に韮山に逃れた頼朝は北条時政・義時に出迎えられる、九死に一生を得たのです。

八重姫は、しばらく伊東館に閉じ込められますが、頼朝恋しさに侍女と共に館を脱走します。しかし、北条館に到着した八重姫たちを待っていたのは、頼朝が北条政子と結ばれたという事実でした。八重姫は頼朝に会うことも叶わず、門番に追い返されてしまいます。悲嘆に暮れた八重姫が入水した場所は、「眞

珠ヶ淵」と言われていますが、これがどこであったかはよくわかっていません。一説には狩野川の支流の古川だと言われています。伊豆の国市中條の眞珠院には八重姫御堂（静堂）と呼ばれる堂があります。この堂は当初、眞珠院の東にあった満願寺（廃寺）に建てられていましたが、江戸時代後期に眞珠院に移されました。現在八重姫御堂の脇には、たくさん小さなはしがが奉納されています。これは、川に身を投げた八重姫を哀れんだ村人たちが「せめてはしごがあれば、姫を助けられたのに」という思いから、はしごを供養するようになったことに由来します。

伊豆の国市田中山には、「女塚」という地名があります。八重姫に伊東へ戻るよう命じられた侍女たちは、道中の田中山まで来たところ



「女塚自刃」岩井玉水筆 当館蔵 近現代  
企画展「頼朝旗挙げ物語」2021年12月3日  
～2022年4月22日にて展示

ろで疲れ果て、あとを追うように自害してまいります。その話を知った村人たちが、哀れな運命を辿った彼女たちのために碑を建てて供養したという言い伝えによるものです。現在も地元住民によってその悲しい伝説が語り継がれています。

どちらも、地元の村人たちの温かい思いが伝わるエピソードです。

## 八重姫伝説の諸説

伊豆の国市では八重姫の伝説を前述のように紹介していますが、実は、似たような話が複数の文学作品に残っており、それぞれに描写や結末が異なっています。

例えば『曾我物語』や『源平盛衰記』では、

## 千鶴丸について

八重姫と頼朝の息子千鶴丸は、伊東祐親の命令によって松川の上流の轟ヶ淵に沈められたと一般的には言われていますが、こちらも複数の文学作品等に異なった描写があります。

『日本伝説叢書』『伊東村誌』等では千鶴丸が轟ヶ淵に沈められる際、来宮明神（現在の伊東市鎌田火牟須比神社）の境内にあった橘の枝を握らせ、千鶴丸の死骸が若宮八幡（現在の伊東市富戸三島神社）に漂着した時、その橘の枝が手に握られていたとしています。

また後日談として、千鶴丸が実は生きていたとするものもあります。幸田露伴『頼朝』では轟ヶ淵に沈められる寸前、通りかかった僧侶に引き取られ出羽国（現在の山形県と秋田県）で養育されたとし、『明良洪範』では奥州の神主に引き取られて成長し、その家を継いだとしています。『和賀一揆次第』等では千鶴丸を哀れに思った家臣たちが匿い、後に頼朝と再会したとしています。

このように八重姫の伝説には数多くの説があり、各地にゆかりの場所があります。たとえ創作であったとしても、後世の人々がゆかりの地を守り抜いて語り継ぎ、本に書き残したこと自体貴重な歴史です。私たちもまた、後世に語り継いでいきたいものです。



## 開催されたイベント

### ミニ講座

企画展「北条義時がうまれた里『伊豆の国』の中世」に際して、全3回のミニ講座を開催しました。「北条氏関連遺跡の発掘調査」「源頼家公病相の面の話」「北条氏関連伝説について」という題で市の学芸員が解説しました。参加者は市内の文化財について理解を深めていました。



### まが玉づくり

ワークショップ「まが玉づくり体験」を伊豆の国市生涯学習課主催の市内小学生向け体験教室「あいキッズ」で開催しました。参加者は市内の段遺跡などから出土した古墳時代のまが玉を見学してから、四角い石をやすりで削り、思い思いの形のまが玉を作りました。

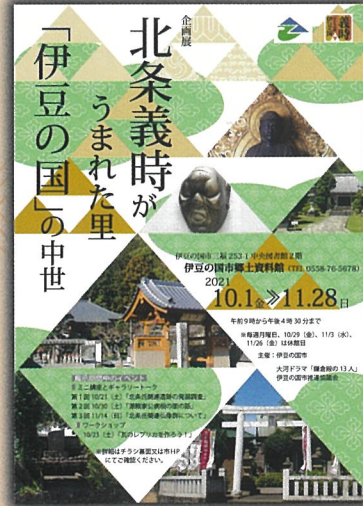


一方、命が助かった頼朝は北条政子と結ばれますが、これ以降その生涯で何人もの女性と関係を持ちます。都生まれのシテイーボーイは女性にモテたのでしょうか。しかし頼朝がこの後も優秀な武士たちに恵まれて源氏再興を果たしていったことから考えると、彼自身にそれだけ人を引き付ける魅力があったのかもしれない。

# 令和3年度下半期 企画展・新イベント

大河ドラマ『鎌倉殿の13人』放映に合わせ、伊豆の国市にゆかりの深い北条氏や源頼朝をテーマに企画展を行いました。また、それぞれの企画展に関連した、子ども向けの新しいワークショップも開催しました。

企画展『北条義時が生まれた里「伊豆の国」の中世』令和3年10月1日～11月28日



企画展『頼朝旗挙げ物語』令和3年12月3日～令和4年4月22日



## ◎ 願成就院の瓦を：

子ども向けワークショップ「瓦のレプリカを作ろう！」では、願成就院から出土した瓦で取った型を用いてレプリカを作りました。原型は約800年前に使われた本物の軒丸瓦です。参加者はシリコン型に石膏を丁寧に流し込み、最後はそれぞれ好きな色を絵の具で塗って完成させました。



## ◎ お正月にミニ屏風！

子ども向けワークショップ「ミニ屏風を作ってみよう！」を開催しました。参加者は屏風について説明を受けてから、干支である寅のシールやペンなどで屏風を彩りました。会場には郷土資料館所蔵の屏風が展示され、最後に完成したミニ屏風を持って、本物の屏風の前で記念撮影をしました。



## インフォメーション

**施設案内**  
 開館時間 午前九時～午後四時三〇分  
 休館日 月曜日 毎月最後の金曜日  
 年末年始(十二月二十八日～一月三日)  
 六月最終週の館内整理期間  
 (図書館休館日に準じる)

**所在地** 静岡県伊豆の国市三福二五三-1  
 (伊豆の国市立中央図書館二階)  
**料金** 無料  
**電話** 〇五五八-七六・五六七八(FAX同じ)

## 周辺地図



伊豆の国市郷土資料館 資料館だより vol.16  
 編集発行：伊豆の国市郷土資料館 令和四年三月二十日  
 印刷：いさぶや印刷工業株式会社